

認知言語学の観点から見た 中国語感情形容詞の意味特徴と機能

——感情表出の場合を中心に——

王 安*

Analysis of the Semantic Features and Functions of Chinese Emotive Adjectives from a Cognitive Point of View

An WANG

要旨：本稿では日本語の感情形容詞と対照しながら、中国語感情形容詞の意味特徴と機能を考察し、感情の表出における日中感情表現の相違点及び共通点を検討する。認知言語学の Grounding 理論に基づき、日中感情形容詞はそれぞれ主体性が全く異なっていることを示し、こうした主体性の違いは人称制限をはじめとする一連の文法上の違いを引き起こす根源であると主張する。一方、感情の表出は感情における普遍的側面で人間に共通するため、その普遍性は日中両言語の感情表出表現に反映されていると予測できる。そこで、本稿は日中感情表出表現の振る舞いにおける三つの共通点を提示した。

Abstract :

Compared with Japanese emotive adjectives, Chinese emotive adjectives have received less attention so far and few studies have been made on its features and functions. The knowledge most well known and mentioned about them is their difference on the Person Restriction phenomenon. That is, when they function as a predicate, in Japanese one cannot say “*Kare ha uresii. (he is happy)*”, while in Chinese the sentence “*Ta hen gaoxing. (Kare ha uresii)*” is totally grammatical. Numerous attempts and researches have been made by scholars about the Japanese case, while what we can tell about the Chinese emotive adjectives on this issue has been left unclear.

Through a contrasting analysis with the Japanese emotive adjectives, this paper aims to explore the following points. First, it will be argued about the essential features and functions of Chinese emotive adjectives, which shows a lot of different aspects from that of Japanese.

Second, based on the Cognitive theory of Grounding, this paper will show that the subjectivity of the Japanese and Chinese emotive adjectives are totally different, which causes the different behaviors on Person Restriction and other related phenomena.

Finally, it will be pointed out that due to the universal aspects of emotions, Chinese language has the expressive linguistic forms to express spontaneous emotion as well and Person Restriction also occurs in those forms. Besides, there are many syntactic commonalities between Japanese and Chinese expressive linguistic forms. And all these similarities implicate the corresponding relationship between emotions and its coding.

キーワード：Grounding と感情の表出、主体性の違い、感情表出の普遍性

*関西学院大学国際学部中国語常勤講師

1. はじめに

現代中国語の形容詞は日本語のそれと同様に用言型であり（松本 2007: 100-102）、それ自体で述語文を構成できる¹⁾。しかし両者は分類方法、意味特徴、機能など様々な側面において違いを見せる。日本語では、形容詞は一般的に事物の属性・性質を表す「属性形容詞」と人間の内的感情・感覚を表す「感情形容詞」の二つに分けられている（西尾 1972: 21）のに対し、中国語の形容詞は感情を表すものと属性を表すものといった区分がなされていない。その一方で中国語では、性質を表すか、または状態を表すかという基準による性質形容詞と状態形容詞の二分類が一般的に認められている（朱德熙 1956、沈家煊 1997、張国憲 2000）。また、意味特徴について、日本語の場合例（1）のように、感情形容詞は述語としてそのままの形で用いられる際に話者の感情しか表せないという人称制限を持つことがこれまでしばしば取り上げられてきた。それに対し、中国語の場合は例（2）のように、他者の感情についてもそのまま表現でき、人称制限が起きない。

(1) *彼は嬉しい。

(2) 他很高兴。

以上の（1）（2）に見られる人称制限はこれまで日本語の感情表現の特質とされており、他者の感情を知り得ないあるいは認識できないためそのまま表現できないと指摘されてきた（西尾 1972）。しかし、「他者の感情を認識できない」ということは私たち人間に共通しており、日本語話者に限ることではない。にもかかわらず、（2）の中国語の場合は人称制限が起きない。従って、（1）（2）の違いを招いた原因は感情に対する認識問題ではなく、日中感情形容詞自体における意味特徴と機能の違いから追及すべきなのではないかと考える。

さらに、日中感情形容詞は次の（3）（4）のような違いも観察される（王安 2013 b: 190）。

(3) 「嬉しい！」

(4) 「*高兴！」

日本語の場合は（3）のように、「嬉しい」などの感情形容詞はそのままの形で瞬間的な感情の表出をとらえるのに対し、（4）の中国語はそのような用法が存在しない（王安 2013 b: 190）。（3）に関しては日本語研究においてこれまでしばしば感情形容詞のゼロ形式と呼ばれ、話者にとって自分自身のことが最もよく分かるから「私」を言語化しないでそのまま表現していると言われていた（池上 1999: 93）。一方、同じく自分自身のことを表現しているのに（4）の中国語感情形容詞はやはり日本語の場合と異なり、そのまま感情の表出として用いられない。しかし、この現象はこれまであまり重視されず、それに関する分析もなされてこなかった。（3）（4）における違いは一体どのような意味を持つのか、日中感情形容詞のどのような違いを示しているのかということも不明なままである。

こうした問題意識をもとに、本稿は日本語の感情形容詞と対照しながら、中国語感情形容詞の意味特徴と機能を検討し、認知言語学の Grounding 理論（Langacker 1985, 1991, 2008）に基づき、なぜ中国語の感情形容詞は（4）のように感情の表出を捉えられないのか、（3）（4）及び（1）（2）の違いを引き起こす原因はどこにあるかを解明する。Grounding 理論は話者の解釈の仕方と言語表現の主体性との関係を捉える枠組みで、感情の表出にその観点を加えた場合、日中感情形容詞の主体性およびそれが捉えている話者の感情の表出の関係を示すことができる。これにより、例（3）（4）の違いを引き起こす原因を論じる。なお、本稿でいう感情の表出とは、「その場その時」に生じた感情を吐露する行為を指す²⁾。

1) 中国語の形容詞は「这个菜好吃，那个菜不好吃。」のように修飾成分を伴わず述語として用いられる場合、比較対比の意味あいが生じる。そのため、一般的に物事の性質を叙述する場合、「这个菜很好吃。」のように副詞などの修飾が必要である。

2) 感情の表出は刺激対象に対しそのまま自然反射的に表出する場合と、聞き手にある印象を与えるために意図的

本稿の構成は、まず第2節で中国語の形容詞の基本特徴と機能を概観し、感情形容詞の位置付けを論じる。続いて第3節ではラネカーの Grounding の枠組みを概観し、それと感情の表出との関わりを述べる。第4節では、3節の分析に基づき、感情の表出における日中感情形容詞の振る舞いをモデル化し、両者における主体性の違いを示しながら、人称制限の違いや(3)(4)における表出の違いの本質を明らかにする。最後に第5節では本稿の内容をまとめ、今後の課題を述べる。

2. 中国語の形容詞の基本意味特徴と機能

2.1 形容詞の基本意味特徴と機能

中国語の形容詞はその形態・統語特徴に基づいて一般的に性質形容詞と状態形容詞とに分けられている。性質形容詞は、「大(大きい)」のような単音節形容詞や「高兴」のような一般二音節形容詞を含んでおり、概念としての性質を表し、物事の属性を区別する役割を持つとされている(朱1982、張2000)。それに対し、状態形容詞には、「大大」「高高兴兴」のように性質形容詞を重ねることによって構成される形容詞の重ね型と、特殊二音節形容詞などがある。その機能は具体的な状況を描写したり、程度を強調したりすることである(朱1982、張2000)。例えば、それぞれの例を見てみよう。

(5) 冲绳的天空很蓝。(⇒性質形容詞)

Chongsheng de tiankong hen lan.

(沖縄の空は青い。⇒「沖縄の空の色は青いという性質を表す」)

(6) 今天天空蓝蓝的。(⇒状態形容詞) (作例)

Jintian tiankong lanlande.

(今日空はとても青くて(きれい…))⇒「青空に対する話者の発話時の認識を表す」)

また、中国語の形容詞全般の意味特徴について、中川(1987: 50)は事態を描く語としては

不向きで、そのままでは名詞に近く、描写性を欠いていると指摘している。このため、当面の関心事に限って言っても、「大!(大きい!)」のように感嘆詞として形容詞を用いることはないという。これは第1節の(4)に示したように感情形容詞にも言えることである。次節では具体的に中国語感情形容詞の意味特徴を検討する。

2.2 中国語感情形容詞の意味特徴と位置付け

中国語では「高兴」などの感情形容詞はその殆どが性質形容詞に分類されており、次の意味特徴が見られる。

I. 感情の表出として用いられない

既に(4)で示したように、中国語の感情形容詞はそのままの形で感情対象に直面した際に生じる感情をありのまま表出する場合には用いられない(王安2013a: 373)。なお、次の(7)のような質問に対する応答に限って中国語の感情形容詞はそのままの形で用いられる。

(7) “今天 高兴 吗?” (北)

Jintian gaoxing ma?

(今日は嬉しいですか?)

“不 高兴。”

Bu gaoxing.

(嬉しくない。)

しかし、以上は質問に対する Yes か No の記述であり、「その場その時」における感情主の心の状態を表出しているわけではない。このように、中国語の感情形容詞は直接感情の表出を表せないという点で日本語の感情形容詞と大いに異なっている。

II. 名詞用法が可能で、感情を概念として捉える

中国語の感情形容詞が性質形容詞として有しているもう一つ重要な特徴は、感情を概念として捉

ゝ 的に表出する場合の二種類が考えられる。前者は例えば感嘆詞がその典型例として挙げられ、後者には「あなたの気持ちがうれしいよ。」のように感情対象を明示した表出の場合が挙げられる。中国語の感情形容詞は自然反射的表出を表せないが、意図的表出を表すことができる。例えば、「哎呀，我太高兴了!」。本稿では、自然反射的表出の場合を扱う。なお、感情の表出における詳しい分類は王安(2006)を参照されたい。

えられ、異なる感情を定義づけたり、区別したり 名詞用法から観察できる³⁾。
する役割を持つことである。これは感情形容詞の

- (8) 我 内心里 的 高兴, 真是 没法儿 形容。(北)
Wo neixinli de gaoxing, zhenshi meifar xingrong.
私 心の中 の 嬉しさ 本当に ~方法がない 描写する
(私の内心の嬉しさは本当に説明しようがない。)
- (9) 那情绪 确 可称之为 难过。(北)
Naqingxu que kechengzhiwei nanguo.
その情緒 確かに それを~と呼べる 悲しみ
(その感情は確かに悲しみと呼べる。)

以上の例では、「高兴」「难过」が連体修飾マーカ―「的」の修飾を受けていることや目的語の位置に置かれていることから、これらの感情形容詞はそれぞれの文において名詞的な働きをしていることが分かる。文脈から分かるように、これらは「嬉しさ」「悲しみ」の意味を表しており、生じている感情の状態は捉えていない。例(8)の「私の内心の嬉しさ」というように、感情を概念として捉えている。また(9)では、ある種の情緒に「难过」というラベルをつけ、感情の種類を定めている。(8)(9)のような名詞用法は中国語の感情形容詞においてよく見られるものである。

Ⅲ. 認知動詞「觉得」「感到」(～と感じる、～と思う)と共起できる

日本語の感情形容詞は「*私は嬉しいと感じる。」のように対象格を明示しない場合において、一般的に「～と思う」「～と感じる」のような認知動詞と共起できないとされている。その理由として森山(1992)によれば、「～と思う」の機能は基本的に個人的な情報として提示することであり、その内容として取り上げられるのは個人的意見・主張など思考内容であるという。しかし、「嬉しい」が捉えているのは思考内容ではなく、発話時の感情状態であるため、「*私は嬉しいと思

う／感じる」は不自然な表現になる。このように、日本語の感情形容詞は感情の表出状態を捉えているため、そのままの形で「～と思う」「～と感じる」の思考内容になれず、これらの認知動詞と共起できない。それに対し、中国語の場合はこれまで述べてきたように感情の状態を捉えていないため、認知動詞「觉得」「感到」の思考内容として問題なく用いることができる(王安 2013 a: 374)。例えば、次の例(10)～(12)のように、中国語の感情形容詞はそのままの形で認知動詞の命題内容として用いられている。

- (10) 感到高兴 (作例)
gandao gaoxing
(? 嬉しいと感じる／思う)
- (11) 感到伤心 (作例)
gandao shangxin
(? 悲しいと感じる／思う)
- (12) 感到寂寞 (作例)
gandao jimo
(? 寂しいと感じる／思う)

さらに、例(13)を見てみよう。

3) 中国語の動詞や形容詞がそのまま名詞的な用法を持つことは中国語全体における大きな特徴である。一方、中国語の形容詞のうち名詞的に使えるものは限られず、感情を表す形容詞は名詞的な用法を持つことにはやはりそれなりに意義があると考えられる。なぜなら、感情の表出は本来常に感情主におけるある時点の心的状態で、アスペクト的な特徴が強いと思われる。にもかかわらず、中国語の感情形容詞は感情を概念として捉えうことは、中国語の感情に対する特殊な捉え方を示唆しているのではないかと考えられる。

- (13) “我 觉得 我 很高兴, 能够 有机会
在麦卡锡时装公司 工作。” (北)
Wo juede wo hengaoxing nenggou youjihui
zai Maikenxishizhuanggongsi gongzuo
私感じる 私とてもうれしい、できる 機
会がある〈麦卡锡时装公司〉で働く
(? 麦卡锡ファッション会社で働く機会を
得られて私は私が嬉しいと感じる。)

(13) では感情は極めて客観視されており、話者は自分の感情を分析し、思考内容・感想として客観的に述べている。これらは日本語に直訳すると不自然な日本語になってしまう。このように、日本語の感情形容詞は裸の形で「～思う」「～感じる」の思考内容として用いられないもしくは用いにくいのにに対し、中国語の感情形容詞は「思う」「感じる」と共起できる。

これまで中国語の感情形容詞の意味特徴を概観してきた。以上の分析から分かるように、中国語の感情形容詞は語彙レベルでは感情を表すものであるとはいえ、意味特徴と機能において日本語の場合とかなり異なっている。次節から、Grounding 理論を参考に中国語感情形容詞の性質を詳しく検討していく。

3. Grounding と感情の表出

Grounding は概念化を行う際に、概念化の主体と概念化される客体の関係のあり方を捉えるものである。ラネカー (2008: 259) によれば、Ground (G) とは言語行為およびその参与者 (話者、聞き手)、また発話の場所・時間などその言語行為と直接関連する状況すべてを含めたものであり、このうち話者が最も中心的である。以下、G を話者、概念化される客体を記述対象と見なす。ラネカーは話者と記述対象との基本的な関わり方を図 1 の三つのタイプに分けている。図 1 では、太線のサークルは、プロファイルされた記述対象であり、その外側の点線のサークルはプロファイルの特徴づける上で最も関連している IS (Immediate Scope) である (Langacker 1991: 318–320)。

図 1 から分かるように、(a) から (c) への順で、話者と記述対象は完全に分離された状態から

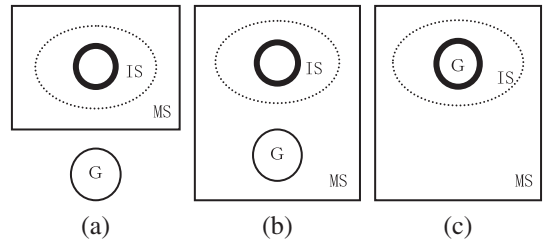


図 1 Grounding

融合された状態になる。具体的には、(a) では話者と記述対象が完全に分離している。この場合、話者も記述対象もそれぞれ概念化を行う主体と概念化される客体としての役割が最大限発揮される。例えば、次の (14) のような名詞や動詞など概念だけが指し表されている場合である (Langacker 1991: 318)。

- (14) Lamp, tree, twist, die . . .

次に (b) から (c) へと変わるにつれ、話者は MS (Maximal Scope) に入り、さらに IS に位置するようになる。話者と記述対象との関係も両極的でなくなり、最後に (c) では両者の役割が融合している。まず (b) では、話者は IS には入っていないが、記述対象を確定するための参照点となっている。言い換えれば (b) の場合、概念化の過程における話者の関わりは図 (a) より強くなる。例えば、例 (15) (Langacker 1985: 114) を挙げよう。

- (15) The best place is (right) here.

(15) では “here” が具体的にどこを指すのかを確定するために、話者を参照しなければならないため、主体性の高い表現である。そして最後に (c) では、話者自身が IS の中に入るため記述対象となり概念化者としての役割がさらに弱くなる。それに応じて主体性の度合いが (b) より低くなり、概念化される記述対象も話者の直接的な関わりによって客体性が高くなる。

このように、Grounding は話者と記述対象との間の非対称性を捉えており、話者の関わり方は (a) から (c) への順で記述対象と完全に離れて

いる状態から記述対象に取り込まれている状態へと変化する。これにより、記述対象における解釈が客体的になり、話者自身における解釈もより客体的になる。

以上解釈を行う際における話者と記述対象の関わり方を見てきた。感情を表出する場合の Grounding を考えると、その参加者は感情主（すなわち、話者）と感情対象（記述対象）であり、感情主が感情対象に対する解釈は引き起こされた感情の表出として現れることになる。ラネカー（1990：8）は感情を経験し表現することについて次のように述べている：

... Suppose I experience an emotion, such as fear, desire, or elation. If I merely undergo that experience non-reflectively, both the emotion and my own role in feeling it are subjectively construed. But to the extent that I reflect on the emotional experience – by analyzing it, by comparing it to other such experiences, or simply by noting that I am undergoing it – the emotion and my role therein receive a more objective construal (1990：8).

（…仮に私がある感情、例えば恐怖、切望、あるいは上機嫌を経験するとしよう。もし私が単に非内省的にその感情を経験するだけなら、その感情も感情を経験する私の役割も両方とも主體的に解釈されている。しかし私がその感情経験について内省する限り－それを分析したり、他の経験と比べたり、あるいは単に自分がその感情を経験していることを自覚することによって内省する限り－その感情とそこでの私自身の役割はより客体的に解釈されるようになる。）

以上の記述から分かるように、感情を経験する際に感情主の関わり方、すなわち感情主がどのように感情の表出を行うかによって感情経験に対する解釈が変わり、感情の表出の度合いが変動する。感情表現の主体性は感情経験の直接性を反映している。次節では、こうした感情主の関わり方の観点から、感情の表出における日中感情形容詞

主体性の違いを検討する。

4. 日中感情表出の対照

4.1 日中感情形容詞の主体性の相違

まず、Grounding の枠組みに照らして例（3）（4）の日中感情表現を図式化すると、それぞれ次のようになる（王安 2013b：199）。

図2では、Eは引き起こされた感情で、Iは話者（感情主）である。EとIの間の線（以下EI関係と呼ぶ）は感情とそれを経験している感情主の関係を示す。図2の（a）は例（3）の日本語の感情形容詞述語文「嬉しい！」に対応し、Groundingの図1（b）の場合に相当する。一方、例（4）の中国語の感情形容詞述語文「*高兴！」に対応する図2（b）はGroundingの図1（a）に当たる。

図2から分かるように、日中感情形容詞はそのままの形で用いられる際にそれぞれが捉えている表出の主体性及びその表出と感情主（話者）との関わりが根本的に異なっている。図2（a）の日本語の場合では、感情の表出E「嬉しい！」は感情主Iが文に明示されていなくても常にそれを参照点としており、感情主Iによる直接表出を捉えている。つまり、日本語の感情形容詞述語文においてGroundingの図1（a）の場合は存在せず、「嬉しい！」は常にIを背景とする主体性の高い表現である。そのため、冒頭で挙げた例（1）のような人称制限が起きる。それに対し、中国語の感情形容詞「*高兴！」はそのままの形で用いられる際に図2（b）から分かるように感情主IがMSの外にあり、EとIの間にはそもそも必然的な関係性が見られず、IはEを認識するための参照点にはならない。言い換えれば、「高兴」は話

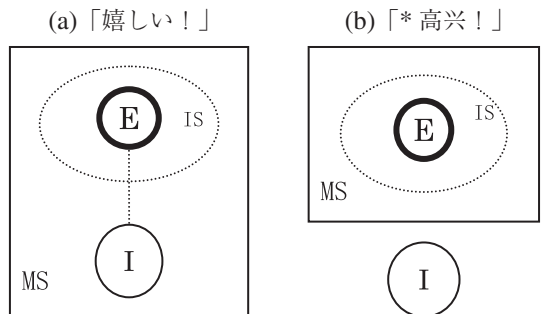


図2 感情の表出における日中感情形容詞の主体性

者（感情主）I と直接に関わらず、そのまま発されても、感情主による感情の表出を捉えられない。このように、中国語の感情形容詞は、「その場その時」における感情主の心の状態を捉えず、感情を感情主から離れた概念として捉えており、例（14）に示した名詞に近い性質を持つ。この点は 2.2 節で述べた中国語の感情形容詞の名詞用法からも根拠づけられている。そのため、中国語では感情形容詞を用いるだけでは、第一人称話者の感情を捉えているとは限らず、異なる人称を主語に取れば、その人物の感情における記述となる。よって、例（2）の中国語には人称制限が起きない。

このように、日中感情形容詞は主体性が根本的に異なる故、(3) (4) の感情の表出用法においても (1) (2) の人称制限においても振る舞いが異なる。これが一般的に中国語の感情形容詞は日本語のそれに比べてより客観的であると言われている原因だと考えられる。

4.2 日中感情表出表現の共通点

4.1 節では日中感情形容詞それぞれが持つ主体性の違いについて認知言語学の観点から分析を行った。一方、私たち人間が刺激対象に直面する際に内心に生じた感情を表出することは人間に共通する生理的現象であり、こうした感情の表出における普遍的側面は言語化される際に何らかの形で言語表現に反映されると予測できる。従って、中国語の場合においても日本語の例（3）のような感情の表出を捉える言語表現が存在するはずである。実際、中国語では感情形容詞はそのままでは表出として使えないのだが、副詞「真」を付け加えれば（例えば「真高兴！」）、その表現全体は感情の表出を捉えうる。以下では「真＋感情形容詞」と表記することにし、中国語の表出表現と呼ぶことにする。表出表現「真＋感情形容詞」は日本語の「嬉しい！」による一語文と同様に、ひとつの表現として単独で用いられ、話者の「その場その時」に生じた感情の発露を捉えている。例えば、日中感情表出の例をそれぞれ挙げよう。

(16)「——まあ、懐かしい！」

（赤川次郎『女社長に乾杯』）

(17)「哩， 真 高兴 呀！」（北）
〈感嘆詞〉 とても 嬉しい 〈語気助詞〉
li, zhen gaoxing ya
（あ～嬉しいわ！）

(16) (17) の日中感情表出表現において次のような共通点が見られる。

ア両文とも主語が明示されていないが、その発話は自然に第一人称“我（私）”による感情の表出として認識される。

イ両文とも人称制限を持つ。日本の場合には既に例（2）で提示したが、ここでは（17）の中国語の場合を検討する。（17）における人称制限は木村（1991）で取り上げられている。木村（1991）によれば、「真高兴！」は次の（20）のように「*他真高兴！」と言えず、三人称「他」を主語にとることができない。

(18)我真高兴！（私は本当に嬉しい！）（木村 1991）

(19)*他真高兴！（*彼は本当に嬉しい！）（木村 1991）

ウ両文ともモダリティ形式を加えれば、人称制限が解除される（王安 2010: 42）。

日本語の場合、すでに指摘されてきたように、感情形容詞述語文はモダリティ形式を伴った場合、話者の判断・推測が表されるため、人称制限が生じない。例えば、次の例（20）を挙げよう。

(20)「太郎ちゃん、何だか嬉しそうだね」
（曾野綾子『太郎物語高校編』）

(20) は話者の「太郎」に対する描写・推測を表すため、人称制限が起きない。(20) と同様に、中国語の (19) も次の (21) のようにモダリティ形式を伴うと、人称制限がなくなる（王安 2010: 42）。

(21)「他 可 真 高兴！」（北）
彼 〈語気副詞〉 とても 嬉しい

Ta ke zhen gaoxing
(彼は本当に嬉しそう！)

以上から分かるように、人称制限の解除に関しても日中表出表現は共通している。

本節では日中感情表出表現における共通点を示した。以上の共通点から分かるように、感情を表出するという感情における普遍的な側面はきちんと日中両言語の表出表現に反映されており、人称制限は日本語だけに見られる現象ではなく、感情の表出を捉える言語表現に共通する特徴である。一方、4.1節で論じたように、日中感情形容詞の主体性が根本的に異なっているため、(1)(2)及び(3)(4)の違いが現れたわけである。これらの違いは感情に対する認識問題ではなく、日中感情形容詞機能の違いが導いた結果である。

5. おわりに

本稿では日本語の感情形容詞と対照しながら、中国語感情形容詞の意味特徴と機能を考察し、感情の表出における日中感情表現の相違点及び共通点を検討した。本稿で分かったことは具体的に次のようにまとめられる。

- I. 認知言語学の Grounding 理論に基づき、日中感情形容詞はそれぞれ主体性が異なっていることを示した。こうした両者における主体性の違いは人称制限をはじめとする一連の文法上の違いを引き起こす根源であると主張した。
- II. 一方、感情の表出は感情における普遍的側面で人間に共通するため、その普遍性は日中両言語の感情表出表現に反映されるはずだと予測できる。実際第4.2節では、中国語にも感情の表出を捉えうる表現があることを指摘した上、日中感情表出表現の振る舞いにおける三つの共通点を提示した。

このように、言語はそれぞれ各自の多様性を保ちながら異なる表現方法で感情の普遍性を忠実に言語化している。今後は感情の表出の場合のみな

らず、意図的表出や感情の描写の場合など、より広範囲で感情の普遍性と言語の多様性の関係を追及していきたい。

参考文献

- 池上嘉彦(1999)『日本語らしさの中の〈主観性〉』『言語』28-1, 84-94.
- 王 安(2006)「感情事象モデルに基づく感情表現体系の研究－日中感情表現の対照による試み－」北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士学位論文
- 王 安(2010)「感情表現における日中対照研究－感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して－」『言語研究の諸相』北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座編、北海道大学出版会、35-45.
- 王 安(2013 a)「日本語の感情形容詞が持つ表出性とその振舞い」『日本認知言語学会論文集第6巻』, 64-74.
- 王 安(2013 b)「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編集、くろしお出版、181-204
- 朱德熙(1956)「現代汉语形容词研究」『语法讲义』商務印書館
- 朱德熙(1982)『语法讲义』商務印書館
- 沈家煊(1997)「形容词句法功能的标记模式」『中国語文』259]
- 張国憲(2000)「現代漢語形容詞的典型特徴」『中国語文』278]
- 松本克己(2007)『世界言語のなかの日本語』三省堂
- 森山卓郎(1992)『文末思考動詞「思う」をめぐる』『日本語文法：体系と文法』ひつじ書房
- 中川正之(1987)「中国語と日本語の形容詞」『日本語学』6], 明治書院、49-57.
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味、用法の記述的研究』秀英出版
- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and Speculations on Subjectivity. In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*. John Benjamins. 109-150
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II, Descriptive Application*. California: Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press, New York.
- [山梨正明監訳『認知文法論序説』研究社]
- 用例出典：北京大学漢語語言学研究センター語料庫
<http://ccl.pku.edu.cn/> (北)